

講壇点滴

サウロの回心

使徒言行録九章一〜九節

牧師 姜 偃 米

サウロは、キリスト教信仰に反対し、迫害していた人でした。そのサウロが主イエス・キリストと出会い、主イエスを信じる者になりました。このサウロこそ、後の大伝道者パウロです。彼は「異邦人の使徒」と呼ばれており、主イエスの福音がユダヤ人だけに与えられたものではなく、信仰によってすべての人々がそれにあずかることができるということとを明確にし、異邦人たちの教会を各地に築いていった大伝道者です。

このサウロの回心の出来事に私たちは大変興味を持ちます。私たちのその興味は、サウロの心にどのような変化が起ったのかというところに向けられることが多いように思います。イエスをキリストと信じる教えに敵対し、迫害していたサウロが、なぜそれを信じ、宣べ伝えるまでになったのか、彼はそこを何を思い、どんな心の変化を体験したのかを知りたいと思うのです。それを知れば、自分自身の信仰に、あるいは信仰の決断のためによい導きを得られるのではないかと期待するのです。そのような思いによって、ある考え方が生まれたりするのです。それは、サウロはステファノの出来事を見ているうちに、心に少しずつ、変化がもたらされたのではないかとということ

です。しかし、七、八章を読んでいくと決してそうではないことが分かります。

それでは、彼はなぜ回心したのでしょうか。そのことを知るヒントになるのは、彼が聞いた声です。強い光に照らされて地に倒れた彼は、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するの」という声を聞いています。あなたはわたしを迫害している、わたしを苦しめ、妨害し、傷つけているという声を彼は聞いたのです。サウロは「わたし」という方と出会ったのです。その方が彼の前に、彼の道を遮るようになり立ちどかされたのです。彼はここで、天からの強い光と共に語りかける「わたし」という方と出会ったのです。そして、自分がその方に敵対し、その方を迫害しているのだということを知らされたのです。

信仰とは、私たちの前に立ちどかる主イエスと出会うことです。そして主イエスによって、自分が見ていること、思っていること、確信していること、依り頼んでいること、全てを打ち砕かれることです。主イエスの出会いは、私たちを、自分の目では何も見えない者、自分の力では生きることができない者とするのです。そしてそこから主イエスが新しく生かしてくださるとき、なすべきことを示し与えてくださるときに、私たちは本当に見るべきものを見る事ができるようになります。本当に見るべきものとは、主イエスの十字架と復活によって神様が与えてくださった罪の赦しの恵みです。それを見つめる目を与えられる時、私たちは、自分の正しき、熱心さ、確信に依り頼んでいくような生き方から解放されるのです。(六月三十日 公同礼拝)

七月講壇一覽

第三主日(六月一六日) 公同礼拝

「神のものは神に」 高橋和人牧師

イザヤ 五二・一〜六

マタイ 二二・一五〜二二

第四主日(六月三日) 公同礼拝

「復活の時には」 高橋和人牧師

出エジプト 三・一四〜一六

マタイ 二二・二三〜三三

第五主日(六月三〇日) 公同礼拝

「サウロの回心」 姜偃米牧師

詩編 一一三・一〜三

使徒言行録 九・一〜九

第一主日(七月七日) 公同礼拝

「生き方の起点」 高橋和人牧師

申命記 六・四〜九

マタイ 二二・三四〜四〇

第二主日(七月一四日) 公同礼拝

「自分は誰に救われるのか」 高橋和人牧師

詩編 一一〇・一〜七

マタイ 二二・四一〜四六

第三主日(七月二一日) 公同礼拝

「私が選んだ器」 姜偃米牧師

詩編 一一一・七〜八

使徒言行録 九・一〇〜二二

第四主日(七月二八日) 公同礼拝

「信仰者の立ち位置」 高橋和人牧師

イザヤ 二六・七〜一一

マタイ 二三・一〜二二